

---

# カテゴリセット

吉野

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カテーテロセット

### 【著者名】

吉野

N4499P

### 【あらすじ】

「君が私を思い出すのは、ちょっと三千里後だ

そう言った彼女。

さよならを言ったボク。

ボクは彼女のこと「×××」と呼んでいたのに。

そして、忘れてしまったのだろう。

その言葉の意味を。

彼女が、誰だつたかも。

記憶の中。

奥底にある、あの日。

曇天。

雪まで降りそつた重い雲。

木枯らしが吹いていた。

母さんに買つてもらつた髑髏が「ワーディウム」でも、  
寒さは首元に染みるよつに感じた。

その黒地に白い髑髏に、×××は笑つたのだ。  
まるで本物のよつだな、と。

クリスマスにコレを送る母はなかなか粋だな。  
「正確には母さんじやないよ」

「ほつ」

「”サンタさん”がくれたんだ」

「そうか。君はまだ”サンタさん”を信じているのだな」  
意地悪に笑う。

その顔は綺麗だけど、少しイライラする。

「”サンタさん”母さんに頼んで買つてきてくれた、だつて  
「やうか」

×××は納得したよつに頷いた。

探偵が証拠を掴んだように、大真面目に何度も。

ボクはそれに反論できるわけも無く、無意識にそのマフラーを口もとまで上げる。

毛糸で編まれたマフラーはボクが欲しいと母に漏らしたものだ。そうしたら、クリスマスにそのマフラーが、まさに自分が欲しいと言ったショップの紙袋に包まれて枕元に置かれていたのだ。

それでも、ボクはそれを嬉しいと思つた。

母さんが覚えてくれていたのだから、それで良いと思つた。なのに、×××はそれを笑う。

「今日、地元に帰るから」

「その挨拶に来てくれたのだな。感謝を述べよう。そして詫びよう。今は家の中は大変なことになつていてな。暖炉に暖まつてもらおうとも、できないのだ。火を入れた瞬間にカー・テンか本かクマのぬいぐるみにでも引火して火災になつてしまつ」

一般的な住宅街の中にぽつんと立つ洋館。

うつそうとした木々は口を拒む。

つて、この時期に掃除中かよ。

でも、×××は手に竹箒を持つて枯葉を掃いていたから、間違いでは無いのだろう。

今年の冬は暖冬で、紅葉も落葉も季節がずれてしまつたから、年越した後もハラハラと縁のまま地面に落ちていた。

じいちゃんに呼ばれて、東京からこの街に年越しにやってきた。三が日が今日で終わつて、帰つて、父さんは明日から仕事だつて。俺はあとちょっと、冬休みを楽しむ。

マフラーは、ここに来る前に貰つた新品つてやつ。

「”サンタさん”はいいな。君にそう無理やりにでも信じて貰える。でも、私は誰一人として覚えても貰えない」

「なんで」

「さあ？ それが私の限界なんだ」

限界。

さらりと、そんな言葉を口にする×××

「お前なんでそんな年寄りみたいに悲観してんのさ。母さんより全然下じやん」

「君の母は幾つだ」

「二十八」

ボクは母さんが十八歳の時の子供だ。

でも、×××はどう見ても大人じゃなかつた。

見た目は十代だ。

高校生とか、大学生とか。

それ位だと思つてた。

「そうだな、永遠の十七歳とでも言つておいつか」

「そういう表現、超おばさん発言だよ」

「おばさん発言は撤回しよ。まあ、どうとでも捉えたら良い」

そして、再び探偵のよつたな頷き一つ。

行動全てがうさんくさい。

何か、全てが嘘っぽい。

”サンタさん”以上に、信じてはいけないよつたな頷き。

「では、君が私の今の年齢を考えればいい」

「……は？」

「君が思う私の年齢だ。素直に言えば良いではないか。幾つでも良いぞ。それは私は歓迎する」

「歓迎つて……」

大げさじゃないか。

でも、彼女は腕を組んでその答えを待ち望んでるみたいで、ボクは大きくため息をつく。

その白い息はすぐ木枯らしに飛ばされる。

寒いな。

挨拶に来ただけなのに、長話をしちゃつたか。

「さあ、言いたまえ」

「えー……じゃあ、俺と同じ年」

「……ほつ

投げやりに言つた年齢に、×××は驚いたようだつた。

そう、俺と同じ年。

「それでは、私は君と同じ十歳

「ということになる」

どう見ても、身長も全でが上に人間に同じ年なんて皮肉も何も無い。

でも、×××はそんなこと怒らなことはボクが知つてい。むしろ、それに楽しむ。

彼女はそういうやつだ。

「だからさ、×××。永遠の十七歳はみんな引くから止めなよ

「ふむ、そうだな。私は君と同じ十歳だ」

「あー、でもそれの方がおかしいかな……」

「いいのだ。君が決めてくれた。”サンタさん”を信じている君が決めてくれたのだ。私はこれで行こう」

これで行こう。

意味が分からぬ。

ああ、やつぱり永遠の十七歳の方が。

「そんな君に、私は言わなくてはいけないことがある」

唐突に、そんな言葉だ。

テンポ崩される。

だから、×××は友達少ないんだよ……。

ボクは前髪を気にしながら×××の言葉を待つた。

「君が私を思い出すのさ、けよひ二三十日後だ」

言いきつた。

しかも、何だ。

思い出すつて。

「そう、文字通り思い出すのだ」

再び、言いきつた。

確かに俺は今日東京に帰る。

でも、その中でもじいちゃんちでやつた事は思い出す。  
年越しで除夜の鐘を突いたこととか、栗きんとんが激甘とか、お  
年玉が多いとか。

その中に、もちろん×××の」ともあるはずだ。

「大丈夫。君はきっと思って出してくれる。私が保証しよつ  
そして、頷く。

新発見したのでは無く、事件の終末を言い終わつた時のよう。

「三千日後だ」

そのまま、竹箒を木に立てかけて入口へ向かつていぐ。  
つまりは家の中に入りつつ……って、言い逃げかよ！

「×××！」

「さあ、君は家に帰りたまえ。同じ年なら、私の気持ちも分かつて  
くれ」

意味わかんねえ。

全く持つて意味が分からない。

やっぱ同じ年つていうんじゃなかつた。

ただ、さよならつて言いに来ただけ。

「さよなら」

言つたのは、×××だった。

その瞬間、木枯らしが一段と強く吹いて、纏められた枯葉を一瞬  
にして舞いあげた。

冷たい。

何だ、それ。

さみしいじやんか。

「泣き顔は見たいのか？」

くすんだ金色のドアノブに手をかけながら、視線は下に向けて、  
彼女はこちらを見なかつた。

長い黒髪が風に舞う。

「私は、君が去るのがさみしいのだ  
だから、早く行ってくれ。」

「そう、聞こえた。」

ボクの幻聴かも知れぬけど、そんな感じがした。  
だから、その背中に言った。

「さよなら」

「ああ、さよならだ」

そう返ってきた。

だから、俺は踵を返してじいちゃんちに戻ることにした。  
木枯らしは冷たい。

頬が切れるんじゃないかつて位に痛い。

”サンタさん”が頼んで母さんが買ってくれたマフラーまで飛ば  
されそうだ。

アスファルトの上を枯葉が舞う。

振り向いても洋館も、木々も見えない。  
涙は出ない。

強い風に当たって、水分が無くなりそうなくらい乾燥して  
さよなら、したから。

それがどれ位先のことか計算できないボクは、ただ3000とい  
う数字だけを繰り返し呟く。

じいちゃんちに帰ると、もう父さんが車を暖めて待っていた。

「三千日後」

風に乗って、×××の声がした。

じいちゃんにさよなら言って、車に乗り込む。  
後部座席に体を滑りこませて、ほつと息を吐く。  
体が冷たくなってたのが分かる。

車のシートであり、今のボクにとつてはホッカイロみたいなもん  
だ。

やつと、マフラーを外せる。  
粹なプレゼント。

おかしな表現だ。

じつと、そのマフラーを観察する。

白い觸體。

その顔がにやっと、こせ、ぐるぐると歪んだ気がした。

「どこに行つてたの

「く？」

「お父さん待つてたのよ。遅い遅いって。渋滞に巻き込まれるからつて」

交通渋滞の心配だつたのか。

決してボクの心配では無いらしい。

「ほり、あそこに行つてたんだ。挨拶しに

「あそこつて」

「第三公園右に曲がつてちょっと行くと、古い家あるじやん。何だろ、洋風な屋敷」

「あの辺は新興住宅街だぞ。全部新築の家しか無い」

運転席から、父さんが笑つた。

新築、じゃないよな、あの家は。

「で、誰にさよなら言つたんだ？」

「……誰つて、だからさ、あいつだよ。その家に住んでる、黒髪の

「名前は？」

名前は。

名前。

そう、名前だ。

さつきまで話してた、あの洋館の主だ。

永遠の十七歳で、今はボクと同じ年の、黒髪の彼女。

その、名前は……。

「誰、だけ」

「知らないわよ、そんなの」

母さんが呆れ顔で俺のマフラーを畳み始めた。

觸體が笑う。

やつ、彼女みたいに今にもうんうんと頷あわうな表情だ。」のマフラーって、こんな顔してたつて。

「夢でも見てたんだな。俺も子供の時はそんなことばっかりだ」「アナタのはたばほんやりしてたんじやないの」

「そつとも言ひ」

「なーにーそれー

ケラケラと盛り上がる車内。

その中で、ボクはほんやり思い出す。

除夜の鐘の低い音。

おせちの栗きんとんの甘や。

じいちゃんから奮発して貰つたお年玉。

（「君が私を思い出すのは、もう二度と一千日後だ」）

どこかで聞いた言葉。

誰からがボクに言つた言葉だ。

三千日つてどんくらいだねつ。

そして、思い出すつて、何だろつ。

やつと、ボクは何かを忘れてしまつてるのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4499p/>

---

カテゴリセット

2010年12月12日04時25分発行